

手賀沼が海だった頃

NO. 2

地域の歴史や自然を皆で語ろう

2000・12・24

手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報

12月28日
講演予定

「戦国時代の東葛・柏地域——北条・上杉の争いと小金城主高城氏」

松戸市立博物館学芸員

中山文人さん（日時は6面）

——今回の講演は、高城氏の視点からとのことですが。

「はい。」存知の方は多いかもしれませんが、高城氏は戦国時代に松戸の小金城（現在の北小金駅の西）を本拠地とした下総有数の武将です。千葉氏の極めて有力な家臣・原氏の家来だったといわれ、十五世紀から本土寺過去帳に名前が見られます。しかし、いろいろなることが明らかになっていくのは、十六世紀後半の五十年程度です」

——室町〜戦国期の柏には、戸張の戸張氏、高田の匝瑳氏の名前が見えます。「両者ともある時点で

他の武将を頼って移住するんですね。移住せざるを得ない状況とは、やはり高城氏が小金城を築き、入ったことではないでしょうか。高城氏が勢力を拡大する過程での圧迫が、一番考えやすい要因です」

——十六世紀後半は上杉謙信ら戦国大名が戦い、信

長や秀吉が覇権を握っていく時代ですね。

「松戸を本拠に東葛を支配した高城氏は利根川・江戸川を押さえようとしたはず」

「そうですね。高城氏は国府台の合戦で相模国の北条氏として闘い、そのうち北条の家来になりま

す。ただ、直属の家来ではなく、全面的支配を受けていない『他国衆』。柏市の多くが含まれる『小金領（高城氏の領地）』は、反北条との境目であったため、大変な苦勞をしていました。真中の高城は味方ではあるが、独立した領主。左右の支配地に圧迫され

「現在の行政区でいうと

松戸市・流山市のほぼ全域、柏・市川・船橋・鎌ヶ谷・沼南・我孫子の一部ということになります」

——柏のどの地域が小金領だったか、明らかですか。

「南部は入ると思えます。北側が問題で、利根川対岸に相馬氏の守谷城があり、一時敵対します。後に城を明け渡して、高城氏がそこまで行って、たら北のラインも決まるかも知れません。古文書がないので正確な領域になると判断が難しい」と

ころです」

——先程、境目だったために非常に苦勞したと。

「この時代の関東の地図に練引きしてみますと、小金領をはさみ、東も西も北条氏が支配してしま

「松戸を本拠に東葛を支配した高城氏は利根川・江戸川を押さえようとしたはず」

るうえ、すぐ北は上杉側などの反北条です。最前線であるがために、北条から酷使された姿が資料から浮かび上がります」

——高城氏から見て、松ヶ崎周辺は、どういった場所だったのでしょうか。

「押さえた証拠はありませんが、押さえようとしたはずの場所です。現在の北柏駅付近は遺跡が集中しています。そういった所は重要で、この場合は交通の要所です。高城氏は江戸川・利根川の両方の水上交

通を押さえようとしたはず。利根川或いは手賀沼水系に出るためには、松ヶ崎・根戸・戸張・沼南町大井あたりはいやでも行き着く場所で、そこから手賀沼を抜け銚子に行くのが最短ですね」

——話は変わりますが、千葉県の中世史研究は、近年大変進んだと言われます。

「千葉歴史学会中世部会の本格的活動、千葉県史の編さん、城館研究などがいっしょに進んだことが挙げられるでしょうか。また全国的な動向として、資料論の拡がり。古文書・遺跡の調査結果・宗教資料、以前はバラバラだったものを結びつける研究になりました。そして視点として入ってきたのが『流通』です。今度の講演では、その流通の話や、政治史を含めた話もできればと考えています」

中山文人さん「小金城主高城氏」（松戸市立博物館企画展示図録）で二十五年ぶりに高城氏の全体史を著す。その他論文に「中世の過去帳について」（松戸市立博物館紀要「三号」など。

通を押さえようとしたはず。利根川或いは手賀沼水系に出るためには、松ヶ崎・根戸・戸張・沼南町大井あたりはいやでも行き着く場所で、そこから手賀沼を抜け銚子に行くのが最短ですね」



松ヶ崎レポート

NO 1

講師 千葉大 顧問 中央高 当会 柏中

鈴木英夫

松ヶ崎の三郡境の不動尊には多くの絵馬が奉納されてきました。「いました」と過去形でいうのは四年前に火事で焼失してしまっただけです。幕末から明治初期の柏の風景を生き生きと活写した絵馬があつた。

絵馬と水神宮・呼塚の常夜灯

と活写した

ただけ本当に惜しまれます。幸いなことに柏市教育委員会がこの絵馬の写真を残していただきました。この絵馬の中に「風景図」と呼ばれる絵馬があります。その絵馬についてひとこと述べたいとおもいます。

「風景図」には手賀沼と水戸街道が描かれ、それらが実際の風景を忠実に伝えていることは「手賀沼が海だった頃」(たけしま出版刊、二〇〇〇年七月)で説明したとおりですが、その後、補足すべきことと気づきました。不動尊の参道には茶屋らしい家屋が見えますが、左側つまり西側の

家屋のさらに左に祠があります。実はこの祠は現在も残っています。水神宮と呼ばれる祠で手賀沼のほとりに多く見受けられます。この祠は江戸時代の寛政九年(一七九七)に勧請された事が刻まれています。この祠は手賀沼が不動尊の付近まで迫っていたことを証明する貴重な史料であるとともに、この「風景図」が当時の風景を再現したものであることを改めて示唆します。

しかし新たな疑問も生じます。一八六五年に旧呼塚橋のトル東側に移り、北柏橋の南側辺りにあります(が描かれていないことです。常夜灯は夜間に呼塚を指す舟にとつて不可欠であり、この地域の水上交通の要地としての一面を象徴するもので省略するのは不自然です。

「風景図」には常夜灯を描けない何らかの理由があつたのでしょうか。考えられるのは次の場合です。①「風景図」が常夜灯設置以前に奉納された絵馬であるか、②常夜灯は全く別の場所にあつたか、③意図的に削除したか、です。

船着き場(現在の同橋よりやや手賀沼に近い場所にあつた)のとなり設置されたはずの常夜灯(現在は数百メートル東側に移り、北柏橋の南側辺りにあります)が描かれていないことです。常夜灯は夜間に呼塚を指す舟にとつて不可欠であり、この地域の水上交通の要地としての一面を象徴するもので省略するのは不自然です。



絵馬「風景図」の拡大図。左隅の小さな建物が水神宮



民家の間に現在も残る水神宮。写真右側

会の活動記録

「古代東海道を歩こう」

平成十二年十月十五日

十一月十二日

平安時代初頭から柏に敷かれていた可能性の高い古代東海道の、市域推定ルートを皆で歩いた。内容、感想は五面

岩瀬微さんを囲む会

十月十九日

県各地で植生の調査などを手がけている岩瀬さんを招き、話を聞いた。史跡は歴史的な野だけでなく、自然などいろいろな分野の価値を持つ。松ヶ崎城周辺を植物の生態学の

視点からも知ることできればと企画した会。千葉県の自然の特徴や柏市、松ヶ崎城の林の植生について説明があつた。三面参照(スタジオ・ウ

講演会「手賀沼が海だった頃」

十一月二十五日

千葉原女性センターフェスティバルの自主活動発表に当会も参加。松ヶ崎城や松ヶ崎周辺の歴史について、鈴木さんが写真やイラストを使いながら講演。「松ヶ崎城の位置と遺構、機能や時代の移り変わり等、パネルを通じてわかりやすく非常に興味を覚えた」

十一月二日

布施弁天東海寺住職・牛田秀一さんを訪ね、柏の昔の話を聞いた。布施弁天と東海寺の関係、カモ漁で賑わった布施の話など当時の様子が語られ、年末の多忙さを忘れたひと時だった。参加者は十人。(布施弁天東海寺)

本の紹介、有難うございました

本の紹介のあと、近視眼的な地域史ではなく、香取の海や関東など広い視野でとらえたことが特徴の一冊。

平成十二年七月に当会で作った「手賀沼が海だった頃」松ヶ崎城と中世の柏北城」を、会報や書評で取り上げて下さった会がありました。発足まもないだけに力強く感じられ、紙面を借りてお礼申し上げます。

我孫子クリオの会会報

第三十号(七月二十日)

我孫子の歴史を、市民の目で勉強しようとして活動しているクリオの会。本書について「手賀沼の歴史は周辺の町や市の歴史でもある。(中略)

国立歴史民俗博物館・友の会ニュース

第九十一号(九月二十五日)

千葉県佐倉市の財団法人・歴史民俗博物館振興会発行の友の会ニュースにも掲載された。

多くの東京研究の本の中に出版後の「手賀沼が海だった頃」も、本の内容や当会の活動について、「研究者と住民が交流しながら史実を掘り起こしていくというありかたに、地域史の新しい可能性を見る思いがした」。

十一月二十五日刊

『東京文獻百科事典』

流山市立博物館友の会編

『東京文獻百科事典』

十一月二十五日刊

『東京文獻百科事典』

稿 寄

松ヶ崎城址の林を見て

岩瀬 徹

私は十二、三年前から柏市の自然環境調査に関わり、主に植物を見てきました。市内は何回も歩いたのですが、ついで松ヶ崎城址に足を踏み入れることはありませんでした。それは知識不足によるものでした。

最近になって手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会の存在を知り、十月十九日に鈴木さん、竹島さんの案内で初めてここを歩きました。短時間の観察で詳しいことはわかりませんが、この林の大きな状況について記してみます。



松ヶ崎城内

林をつくる樹木を針葉樹と広葉樹に分けることがで

きます。広葉樹はさらに常緑樹と落葉樹に分けることができます。落葉樹は春に新葉を出し秋に全部落ちてしまします。常緑樹は葉の一部入れ替わりますが、年中緑を保ちます。針葉樹も平地のものはみな常緑です。

北総台地で何百年も自然のままに置かれたとしたら、そこはシイやカシなどの常緑広葉樹の林になるであろうといわれます。そんな林はめったにありませんが、古い神社やお寺などにその片鱗を見ることがあります。柏では布施弁天のそばにあります。

松ヶ崎城址では、台地の斜面上部や土塁跡にスタシイ（いわゆるシイの木）やアカカシの大きな木が何本かあります。これが古くからの常緑広葉樹林の面影を伝えるものでしょう。昔はこれが多かったと想像されます。シラカシもかなり多く見られます。このカシはもともと屋敷のまわりに普通でしたが、近年は各地の林の間に

増えていきます。そのため林の中は大変暗くなっています。雑木林というのは、長年にわたり人が手を入れ利用してきたことよって成立した林です。コナラ、クヌギ、イヌシデなどの落葉広葉樹が主な木です。手入れのいい雑木林は四季の変化があり、下草の花も楽しめて気分のいいところですが、最近はいれがなくなると林は荒れていきます。松ヶ崎城址にはコナラやイヌシデはあまり多くないようです。

針葉樹はマツやスギ、ヒノキなどです。かつてこのあたりにはマツ林が多かったと思われませんが、マツ枯れの蔓延でほとんど枯れました。そのあとにたくさん植えられたのがスギやヒノキです。たまた太いスギもありますが、多くはまだ若いものです。

林は適度な下刈りが加えられることによって、いろいろな草や木が生育します。ここはあまり広くはありませんが、適切な管理（手を加える、加え過ぎない）によってかなり多くの種類が生育できると思われます。そのため現在どんな種類があるか季節ごとに調査しておくことが必要です。

本書は一九九九年六月に行われたシンポジウムの記録と松ヶ崎城の研究からなっている。報告は松ヶ崎城に直接関係するものと地域の歴史に関するテーマに大きく分けられる。前者は鈴木英夫氏と

たのがスギやヒノキです。また太いスギもありますが、多くはまだ若いものです。林は適度な下刈りが加えられることによって、いろいろな草や木が生育します。ここはあまり広くはありませんが、適切な管理（手を加える、加え過ぎない）によってかなり多くの種類が生育できると思われます。そのため現在どんな種類があるか季節ごとに調査しておくことが必要です。

特に珍しいものがあるというのではなく、その地域に普通のもので十分にそろっていることが貴重な存在といえます。

（千葉県立中央博物館友の会会長）

遠山成一氏の報告、後者は川尻秋生氏や鈴木哲雄氏、中山文人氏の報告がある。鈴木英夫氏はスライドを使って松ヶ崎城の現状紹介し、遠山氏は城の構造から使用時期や築城の意味等を説いている。川尻氏は香取の海を通し

評書 『手賀沼が海だった頃』 津田芳男



今年7月、当会で出版

崎城に移ったからで、大きな前進と言えよう。さてこのシンポジウムで発表された個々のテーマは、最新の研究成果に基づ

て、当時の水上交通の展開と意味を、鈴木哲雄氏も相馬の御厨の問題から当時の柏周辺の状況や交通路を推定し、松ヶ崎近辺が交通の要の一つではないかとしている。また中山氏は文献や石造物等から柏北城の歴史事象を紹介する。そして質疑応答では広範囲に渡った討論が記録されている。

また後半の「松ヶ崎城研究」は、シンポジウム後に行われた講演を基にまとめられている。中でも「これまでの松ヶ崎城研究」は今後進めるであろう城の研究に役立つだろう。

たった一回のシンポジウムで、地域の歴史を解き明かすことは難しいと思う。実際松ヶ崎城に関する疑問は明らかになされたのではなく、逆に深まったのではないだろうか。しかしこれは人々の関心が「単なる山」や「城跡」から、歴史事象としての松ヶ

写真家・松本十徳さんに聞く 神社彫刻 龍の来たみち

新年——。無病息災を祈り

多くの人が神社に参拝するが、神社の建物に施された彫刻については意外に知られていない。柏市に住む松本十徳さんは龍を中心にした神社彫刻を三十年間追いつけてきた写真家だ。今年九月にも中国の辺境の町を訪れて、日本の相型と思われる龍を撮影してきたばかり。神社彫刻にはどのような歴史があり、何が表現されているのか。松本さんに語ってもらった。

●中国の龍は皇帝のシンボル、仏教の守り神

架空の動物である龍を、中国では星座の形から想像したと言われています。後に、四方を守る四神に取り入れられ、漢の武帝の時代から皇帝のシンボルとして使われ始めました。水にも潜れ空にも昇ることのできる龍は、強い皇帝の象徴としてふさわしいものだったのでしょう。その頃の龍は、廟（びょう）など皇帝に関わる石窟の彫刻などで残っています。



中国で現存最古の木彫りの龍
＝山西省晋祀聖母殿

やがて、インドで仏教が生まれ、中国に伝わります。龍も取り入れられ、仏教の守り神となりました。建物の装飾のため木で彫られた龍のうち、現存する最古のものは、一一〇二年に建てられた山西省大原の晋祠（ふしん）聖母殿の彫刻です。

●日本に伝わり、神社や寺院の彫刻に

その龍が、明の文化と一緒に日本に入り、神社に広がりました。やはり仏や神を守るシンボルとして、あがめられ彫られたのでしょう。



後藤安五郎常善の見事な龍
＝柏市布施弁天東海寺

現在国内に残る最も古いものは、一五六三年、室町時代末期に建てられた土佐神社の装飾です。龍は「天と地と水」を象徴するといわれ、自然を畏怖する人々の気持ちから生まれました。中国では皇帝のシンボルとなりましたが、日本では発生した頃と同じく、再び庶民の信仰のシンボルとなったわけです。

●側面に、中国の故事や日本の神話も

龍の他に、本殿の側面に中国の故事や日本の神話の一場面が彫られたものがあります。「龍が運んだ文化」と私は呼んでいるのですが、中国から儒教が伝来し、幕府の奨励もあつた江戸時代には庶民の間に大変浸透しました。その儒教を教えるために、中国の故事や二十四孝と呼ばれる親孝行の物語が題材になりました。



親孝行の話「郭巨」の一場面＝白井町鳥見神社

例えば、二十四孝の中でも代表的な「郭巨」の話。母親を飢えから救うため、我が子を殺そうとする夫婦の話です。「子供を愛することは鳥獣でもできるが、親に対する孝は人にして初めてできる」というのが中国の絶対最高の道徳だったようです。また日本人に人気のある詩仙・李白もよく彫られています。

●板の部分に彫られているのは、龍・麒麟など益獣です。柏の中にも彫刻が施された神社は所々残っています。布施弁天はさきほど言いましたが、近辺では野田市茂木佐公園のよるこび教会釈尊堂や愛宕神社、白井町鳥見神社の彫刻が見事です。

●松本十徳さん 東京総合写真学校卒業後、重要文化財報告書の写真撮影に携わる。以後、建築装飾の霊獣をテーマに、現在中国や日本の神社彫刻の記録や江戸期の名工たちの系譜を本にまとめている。著書に『アジア看看』（徳間書店）他

●側面に、中国の故事や日本の神話も

●板の部分に彫られているのは、龍・麒麟など益獣です。柏の中にも彫刻が施された神社は所々残っています。布施弁天はさきほど言いましたが、近辺では野田市茂木佐公園のよるこび教会釈尊堂や愛宕神社、白井町鳥見神社の彫刻が見事です。

平安時代の道、想像しながら楽しみなながら

“古代東海道を歩こう！” (当会主催) に90人

平安時代初頭から、柏市内に敷かれていた可能性が高い古代東海道『柏市史』で「柏南部から東部にかけて敷かれていたのでは」と新説を発表した高田淳さんと一緒に、市域推定ルートを歩いた。

古代東海道を歩く会雑感

当会会員 榎 慎吾

手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会主催による歩く会が十月十五日と十一月十二日の二回実施された。

当会会員の他に一般市民も多数参加され両日で述べ、九十名が参加。主催者側は予想を大きく上回り嬉しい誤算でおおはりきり。

一回目は柏市藤心から松戸市金ヶ作までの八キロメートル、二回目は柏市逆井駅から我孫子市根戸までの十キロメートルを一人の落伍者もなしの快挙？ 柏市史執筆で歴史研究家の高田氏のきめ細かい説明を拝聴、柏周辺地域の中世の歴史とロマンに夢を馳せながら、参加のシニア達は秋のひとつきを元気に完歩した。



高田さんの説明に耳を傾けた



葛津駅が想定される藤心の台地

の歴史を勉強してからとの思いで非常に良く勉強し、参加している方が増えていきます。

私はNPO法人パートナーとかつ(生涯学習委員ボランティア)の会員でもあるが、今後は東葛地域の市民の方々と数多くの接点を求めていきたいと願っています。

市民のニーズに合った学習テーマに私達が住む地域の歴史を選ぶことは大切な一歩であると考えます。

今回の歩く会に参加された方々、これから参加しようとお考えの方は是非、私達「考える会」に入会され、これからの人生を一緒に楽しみましょう！

地名「葉山」、
駅馬が往き来
した名残？

柏市内で、古代東海道に關係するかもしれない「葉山」という地名が見つかった。

柏市役所から約五、六百メートル南東の、国道十六号線沿いの地域だ。区画整理前は「柏市葉山」だったが、現在は「柏七丁目」や「柏」に統合された。

では、この「葉山」、古代の道とどういう関連が考えられるのか。高田さんは説明する。「葉山(はやま)」は「早馬(はやうま)」のなまった地名の可能性が有ります。官道を使者(駅使)が馬で走って行くわけですが、その「駅馬」を、『万葉集』などでは「はゆま」と言っています。

やはり古代東海道が通過していたと思われる神奈川県葉山町、古代伊勢斎宮道の途上の三重県松坂市早馬瀬(はやませ)町など、いくつか例があります。柏の葉山も古代東海道の推定ライン上にある、駅馬が往き来していたことの名残かもしれません。

域 史跡ウオッチング
北 柏市遊歩会主宰
赤間榮太郎

花野井小学校から北に進むと、近代的住宅群の東急柏ビレッジに入ります。

『柏市字界図』には、初めて四つ角東一帯を字番城面と書き、道端に柏市教委の散歩指標があり、『小字名は「番城面」と言い、もとは番匠免だったと思われる。番匠とは工人(大工)の事で免とは税の免除など、昔城ノ越(現自衛隊敷地)に城があり、その番をしていたことから「番城免」とも言われています(後略)』

更に北進、私の推奨する公園らしい公園『東急柏ビレッジ第五公園』に到って再び散歩指標に『城の越(腰)には昔話も残されています(後略)』

兵(つわもの)どもが夢のあと

やがて戦が起ってこの小城は紅蓮の炎に包まれたが、常陸の殿様は切齒扼腕するのみだった。

土地の古者はこの小城を将門側妻の館と言ひ、常陸の殿様とは守谷の将門？、側室(お部屋様)が居たから大室？など、地名の起源にも飛躍して推測もまた楽しい。

小青田(こおだ)の姫宮神社前の散歩指標に、『窺目の着物で椿の花を持ち、黒塗の下駄を履いた女の神様を祀る』とありました。

諏訪神社の古谷宮司は、「将門時代の小青田はかなりの集落があり、窺目の着物や黒塗の下駄を禁じ、椿を植えないのは将門の悲劇にまつわるのでは？」

悲劇の城の越は、兵(つわもの)どもの夢を育てる基地(陸上自衛隊訓練所)になりました。



東急柏ビレッジ第五公園

1月28日講演予定

「戦国時代の東葛・柏地域」

一面で紹介した講演の詳細は次の通り。ご参加をお待ちしております。◇一月二十八日(日)午後二時～四時◇スタジオ・ウー

会からのお知らせ

▽会費納入の件

これまで、イベント参加の際に現金で受け取っていましたが、これからは基本的に四月總會時の現金納入と、千葉銀行への振込みでお願いします。ご協力よろしくお願致します。

「振込み先」 千葉銀行柏支店 (ZCOC) 普通預金 3461475 (手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会 伊江有可里)

▽当会の自己紹介

平成十一年九月に設立した市民有志の会です。顧問は千葉大講師・柏中央高校教諭の鈴木英夫さん。イベントは会長・副会長以下役員と顧問の十人で構成する役員会で企画しています。これまで、本出版・講演会やウォーキングイベントを開催してきました。

(柏駅東口、イトーヨーカドー斜め向かい) ◇講師 中山文人さん ◇料金 千円 ◇問合せ 0471-31-8879 北さん

した。年度は四月から翌年三月、總會は四月に開催予定です。

▽会員募集 年会費二千円

で会員になり、一緒に楽しみませんか。会報、イベントのお知らせをお送りします。会報は基本的に年三回、四ページを予定しています。郵便番号・ご住所・電話番号・ファックス番号・お名前を、会事務局までハガキ、ファックスまたは電話でお知らせください。

「事務局(入会等問合せ)」

〒277-0835 柏市松ヶ崎415-5, 1-206 手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会事務局 北絨子 氏・FAX 0471-31-8879
「会計(会費等問合せ)」 松平信子 氏 0471-33-6438



* 市外局番なしの電話は、「0471」の省略

本紹介

『手賀沼が海だった頃ー松ヶ崎城と中世の柏北域』(当会)

昨年当会で開催した歴史シンポジウム。その記録を中心に松ヶ崎城の説明、松ヶ崎周辺地域の歴史などをわかりやすくまとめた内容。歴史がないと言われてきた柏だが、交通や流通という視点でとらえると、非常に重要な位置にあることが浮かぶ。新しい柏の歴史発見に。A五判百五十六ページ、千五百円 氏58-4512 だけしま出版

☆★本書に収録した遠山成一さんの「フナト・フナツ」研究が、今夏に出版された「千葉県の歴史」(山川出版)の歴史コラムに取り上げられている。中世東国の水運について、「小

さな地名や景観の研究が大きな研究に発展する一例」と添えられている。

『柏の自然を歩こう』(柏市環境部)

柏市内に自然観察コースを設定し、写真やイラストで楽しく解説。それぞれのコースで見られる動植物を写真で紹介した他、「湧水のしくみや現状」「野生の哺乳類と鳥」「巨樹」など知識ファイルもある。市民が自然環境調査員として活動した結果も取り入れられ、子供から大人まで楽しめる内容になっている。A五判四十七ページ、三百円 氏63-4422 柏市環境部環境保全課

『松戸の歴史散歩』(千野原靖方さん著)

千葉氏や里見氏など、千葉県の中世史研究で知られる千野原さんが、全地域取材し直して執筆。「松戸の社寺・史跡めぐりに出かけてみたい」という人々のために」と、駅を拠点に史跡をまわることができよう考えられたガイドブックだ。特に「国府台の合戦」や「城跡」などでは、あまり扱われてこなかった

た鎌倉・南北朝の歴史についても記述され、千野原さんならではの考察や解説も。B五判千六百円▽氏58-4512 だけしま出版

『常陸国風土記をゆく』(柴田弘武さん著)

奈良時代に編さんされたといわれる「常陸国風土記」。その内容を軸に、現在の常陸国域を歩きながら紹介している。地名の語源、伝承や説話が伝えること、当時の「駅」がどこに比定されるかなど、新しい調査結果や資料まで含めて検討。古い時代に編さんされた文書が身近に、また幅広い理解ができる。写真は写真家・故横村克宏さんが撮影し、かつての常陸国の風趣も感じさせる八十六枚。A五判二百二十二ページ、二千円。氏58-0035 尚書房出版

『東葛文献百科事典』(流山博物館友の会)

「東葛地方をテーマとするブックレビュー」と編集された、友の会編の「東葛流山研究十九号」。東葛全域、流山、野田関宿、松戸、柏、我孫子沼南、利根川江戸川の章に分けられ、百七十七冊の本と市史な

イベント紹介

松戸市立博物館

学習資料展「教科書のなかの道具とくらし」

小学校社会科の教科書に登場する一昔前の道具や住まいの様子を展示する。暮らしの変化について考えてみようというテーマ。期間は一月十六日～三月三十一日。氏047-384-8181。また同館では毎月第一日曜日に江戸時代の旅装束(たびしゅうぞく)の試着体験を実施中。受付 氏047-384-8272 試着体験係

当欄は、会員であるなしにかかわらず掲載します。情報は左記まで

会報作成 浦久淳子 氏・FAX 55-2351